

松本 准平 さん

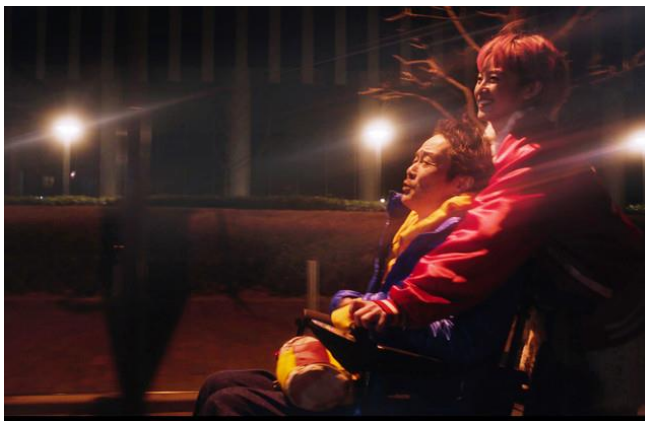
映画監督

1984 年、長崎県生まれ。東京大学工学部建築学科卒業、同大学院建築学専攻修了。吉本総合芸能学院(NSC)東京校 12 期生。カトリックの家庭に生まれ、幼少期からキリスト教の影響を強く受ける。NPO 法人を設立し映像製作を開始。2012 年、劇場監督デビュー作となる『まだ、人間』を発表。続いて 14 年、作家・中村文則の小説を原作とした『最後の命』を監督。同作で NY チェルシー映画祭・最優秀脚本賞を受賞。16 年には第 40 回香港国際映画祭で審査員を務めた。



片岡： 今月のインタビューは映画監督の松本准平さんです。まず最新作の「パーフェクト・レボリューション」（監督・脚本：松本准平、主演：リリー・フランキー、原案：熊篠慶彦）についてお伺いしながらインタビューをはじめたいと思います。

松本： 今回の作品は、脳性麻痺を抱えつつ、「身体障害者だって恋をするし、セックスもしたい」と障害者の性に関する社会の認知のされ方を変える活動をしている熊篠慶彦さんと出会い、彼の話をもとに、「重度の身体障害があり、車椅子生活を送りながら、障害者への誤解を解くために活動するクマ（リリー・フランキー）



©2017 「パーフェクト・レボリューション」製作委員会

と人格障害を抱えた風俗嬢のミツ（清野菜名）、障害のあるふたりが、まわりに立ちはだかる壁をぶち壊して、“完全なる革命”を成し遂げようとする」ラブストーリーで、「不可能を可能にする」というのがこの映画のテーマです。脚色もしましたが、7割ぐらいは本当の話です。

ミツも実在の人物で、人格障害という設定は脚色ですが、彼女は元・風俗嬢で、そして有名なブロガーです。二人は当時実際にお付き合いをされていて、出会いも映画の通りです。障害者の性についての講演会に参加したときに、講演していた熊篠さんを見て「障害者なのに、こんな活動に取り組んでいる」とひとめぼれをして、

そのまま付き合っただけで欲しいといったそうです。勿論、彼女の人生も色々あったのでしょうが、それでも屈託がなく生きていて、本当に魅力的な方です。お会いし、この人を描くべきだと思い、キャラクターに落とし込んでいきました。

片岡： その講演会では「しゃべっているだけで、人に驚かれることがあるんです。“あれ、言語障害ないんですね”“あれ、頭はちゃんと回っているんですね”。ましてや下ネタなんて言おうものなら、新種の怪物やゴミを見るような目で見られる…“あなたは障害者なんだからそんなこと言っちゃだめだよ”“考えちゃダメなんですよ”…障害者だって恋もするし、オナニーもする、セックスだってしたいんです。障害者は新種の怪物やゴミなんかじゃない。ましてや聖人君主でもない。障害者もただの人間です」というクマの言葉は印象的でした。

またクマが書店の女性店員のスカートの中や胸を覗こうとするオープニングは、男そのものでしたね。

松本： あれは実際にやったことあるといっていたような…。熊篠さんとお会いするうちに、障害者を社会的弱者としてではなく、普通の人として描きたいと思うようになりました。そこで我々が持っている障害者に対する価値観を最初のシーンから変えようとあのシーンにしました。



(c)2017「パーフェクト・レボリューション」製作委員会

片岡： クマには、たった 5 cm の段差が大きなハードルとなる。家の中で倒れてしまうと通報もできない。食事だって本当に大変です。しかし、それはいわゆる障害者らしく生きなければならぬということではない。普通の人のように自分らしく生きようとする彼らを、寧ろ我々が社会的弱者のステレオタイプのイメージに押し込めていきますね。障害を持つことや風俗の仕事を前向きに語るクマとミツに、テレビ局の人たちが、「ちょっと無理してませんか…もうちょっと困った話をして欲しい…ムードを出したい。障害者らしく、風俗嬢らしく…」と。またおし



(c)2017「パーフェクト・レボリューション」製作委員会



(c)2017「パーフェクト・レボリューション」製作委員会

やれもやめて欲しい…。つまり“クマ”や“ミツ”ではなく、社会が見たい障害者と風俗嬢に仕上げたいわけですね。そして、そうしたことが彼らを深く傷つける…。

松本： ああいう空気が実際にありますからね…。

片岡： クマの痙直した手の写真をアップで撮ろうとするシーンも同じですね。障害者だって普通の人だというクマを、障害者のイメージに押し込めようとする。あの時のクマは本当にやるせない感じでした。

松本： あれは、僕が書加えたシーンですが、熊篠さんもあれをやられるとチクッと痛いと言っていました。

片岡： 障害者もそうですが、彼らを支える家族も色々な面を持つ普通の人間です。障害者を支える家族はとても大きな負担を引き受けているのですが、勿論、そこには人間らしい葛藤もある。そして彼ら自身が、障害者はこうあるべき、障害者はこうだから…と善意の壁を作っていく…。ボランティアで懸命にクマの世話をする恵理（小池栄子）も同じですね。そうした周辺の人々を生々しく描いていますね。



©2017「パーフェクト・レボリューション」製作委員会

松本： 見せるところはちゃんと見せないで、本当に見せたいものまで嘘っぽくなってしまおうと考えています。ですから、なるべく全て本物、嘘をつかないようにしようと思っています。

ところで、僕は小さい時からずっと手塚治虫や藤子不二雄、ディズニーが好きで、今映画を作っている根本的な理由の一つはこうした作品にあると思います。



©2017「パーフェクト・レボリューション」製作委員会

勿論、そのあと現実を知るようになってあんな世界は実際にはない、ディズニーの世界は現実には難しいと分かったのですが、それでも信じるべきものを教えてくれたのはこうした作品です。夢と希望に満ちた現実離れした世界のように見えるのですが、現実が違うからとあきらめるのではなく、ああいった作品で描かれていることを信じられるように世界を少しずつ変えなければならない。実際、それらの作品に感動を感じる人はたくさんいます。だからああいう世界を信じることは、本当は正しいことだと思うし、少しずつかもしれないけど現実を変えることもできると信じています。

リリーさんに「パーフェクト・レボリューション」の脚本を渡したときに「ディズニーが好きですか？ ディズニーっぽいですよ」といわれました。ちょっと臭い愛



を何とかを信じようとしているところやダンスをしたりしているところなどでしようか…。

片岡： 確かにディズニーっぽいテイストですね。そして、障害者の性というテーマですが、軽やかに仕上げていますね。

松本： 今回僕は、どういう作品にしていくのか模索する中で、僕が監督する理由のようなものがわからなくなっていくのを感じました。そうした中で、当時子供が生まれたばかりだったというのもあり、これまで描いてきた人間の罪などではなく、ひたすら希望を描きたい、従来の障害者の映画というどうしても、感動して泣ける、これまでの作品のちょっと重たい映画というイメージと違って、明るく、楽しい、ポップな映画にしたいと思いました。タッチはライトですが、「パーフェクト・レボリューション」も、僕のテーマ、弱い人たちが強く生きる姿を描いています。

片岡： 「なんでこんな体に生まれてきたんだろう。…そう確率的には低いんだよな。でも確率の低いことが俺には起こった。それってなんか意味があるんじゃないかって子供の頃たまに思っていた。俺の手足が使えないのは、お前は手足を出すなよってことじゃないかな。だから何かを受け入れることについては、俺は普通の人よりもプロフェッショナルなんじゃないかな」というクマ、ミツの「障害は私たちのためにある…」という言葉、まさに“強く生きる”ですね。

松本： 今回、色々なことを深めることができましたので、個人的には前作「最後の命」（主演：柳楽優弥、原作：中村文則）でやり残したことにもう一回挑戦したいという気持ちもあります。「最後の命」は商業映画の一本目でしたので、まだ色々可能性が残っています。また長崎出身でもあるので、どんな作品を作るにせよ、僕の祖父が経験した原爆の世界と地続きの世界を撮っているのだということを忘れないでいたいと思っています。それを忘れて映画を撮っていても、僕の存在意義がない、映画監督をやっている意味がないような気がします。僕は実際には見たわけではないけれど、70年間は草木も生えないといわれた長崎の地で生きてきた僕の祖父たち、その人間の尊さ、希望、強さ、そうしたものに到達したいと思っています。

僕自身、社会のことにも関心がある方ですし、社会に対して何かを訴えたくて映画監督をやっている部分もあるくらいですが、監督としては、障害者の性についてフォーカスしているという意識はあまりなく、普遍的な価値、人を感動させる何かの力を届けるという視点を追求しています。つまり、障害者の性のようなテーマを取り上げることで、人間の本当の存在の深いところまで描ける気がする。アンタッチャブルな部分を掘り下げれば、世界や人間に対する見え方や生き方が、少し変わるのではないかと、新しいものが見つかるのではないかとというスケベ根性のような思いもあります。それは誰も使っていない、古くて危ない梯子なのかもしれませんが、それを使えば遠いところまで行けるような気がしています。勿論、目を惹くと

いう、マーケット的な要素も考えます。尤も、障害者というテーマは難しい面もあって、あまり障害者の映画だというようには打ち出してはいないのですが、それでもツイッター等では、「これリツイートしていいのかな」、「コメントするのだったら、問題発言もしないようにしなくては…」とコメントがしづらいようです。

ところで、映画の監督は人の力を借りないと何もできない芸術家です。俳優の力、スタッフの力…。そこは常に意識しています。監督は絵を描くわけでも、文字で新しい社会を作れるわけでもありません。この世界のどこかにカメラを向け、現実をとらえないといけない。その現実には、色々アンテナを張って、どうやったら面白い芸術作品、映画が作れるか考えています。

さて、前の作品も今回の作品も誰に依頼されたわけでもなく、出会った現実に興味を持ち、自分で始めました。ファンディングも今回は半分くらい、昔はほぼすべてを自分でやっていました。小さい会社の社長を一時的にやっているみたいなものです。

片岡： プロデューサーに近いですね。

松本： 日本の映画事情が少し特殊で、基本的には雇われ人のような監督が多いのですが、米国や韓国では監督はインディペンデントで、またプロデューサーを兼ねていることも多い。監督の中にあるイメージは人と共有できるものではなく、またお金集めとか、マーケティングも含めて、総合的に考えることが必要です。そういう人が増えてこない、どうしても単に売れている原作をやればいいやというような考え方になってしまいます。

片岡： 予算はどれくらいでしょうか。

松本： 一般的に日本映画は、大きいところが5~10億円いかないくらいです。その次が2~3億円、その下が1~2億円…となっています。そういう意味ではまだまだです。それにそもそも米国とは桁が違います。中国も米国のようになっていますが、野望としては、そういう環境でやりたいと思っています。クリエイティブの質が全く異なってきますから…。

それに、わりと義理人情の世界です。例えば、これは米国に比べると低予算で映画ができる理由の一つでもあるのですが、労働条件等も曖昧です。米国では俳優やスタッフ等の組合の力が強く、色々なことが厳しく決められていて「あとちょっとで、このシーンの撮影が終わるから、もう少し頑張る…」などと言うことは出来ず、時間になればそれで終わり、「後は明日」となります。そうになると、どうしても時間もお金もかかります。今回の作品は3週間ほどで撮影を終えています、米国であればとてもそうはいきません。

片岡： 売上に応じたインセンティブについては如何でしょうか。

松本： そこは大きな問題です。米国では、主要キャスト、監督、メイン・プロデューサー等は、リクープ（回収）した後、成功報酬があり、最初に貰うお金が少なくても

ヒットさせれば大きな収入が得られます。しかし、日本にはそういう慣習が殆どありません。最終編集までやったということに対してお金をもらい、後は2次使用、DVDやテレビ放送時に、ほんの少しの印税をもらいます。つまり儲からない。そうすると、プロデューサーや監督をインディペンデントでやっていくことはリスクだけがあまりに高くなってしまいますので、目指す人たちも少なくなるでしょう。ヒットさせることができれば、次の作品があるというだけです…。これだと、作り手側が疲弊していくことは間違いありません。だから、経済のことはうまく改善して欲しいですね。

またこうしたことには、製作段階から世界を見て作品を作る米国や韓国等とは異なり、日本は日本向けにしか映画を作っていないということも関係しています。尤も、市場規模だけでいうと日本は世界第三位です。入場料が世界的に見るとかなり高いということもありますが…。

片岡： 実力や人気はギャラよりも作品数という形で反映されている…。結局、作り手を圧迫しながら、小予算の作品が大量に作られるという形でしか成り立ちにくい産業構造だということですね。マーケティングについては如何でしょうか。

松本： 配給・宣伝の予算は概ね全体の半分くらいです。またデータを解析し、活用してヒットに導くようなこともできればいいのですが、日本は詳細なデータは特定の場所に格納され、そこには触れられません。結局、直感的なものを選ぶ。もう少し合理的に考えれば、別の答えも出るはずなのですが…。未だジメツとしたところで仕事が進んでいます。費用も掛かりますので、大きい組織で合理的なトライやクリエイティブなチャレンジできれば浸透していくのかもしれませんが、日本は既に、それが意味のないマーケットになっているのかもしれませんが…。

今、日本映画が廃れつつあるのは否定できないと思います。本当にクリエイティブなもの、人の心に訴えるもの、一個人に結びつき人生を変えるようなもの…。そういうものを産業として作っていくには、今のシステムが邪魔になっている面もあるのだろうと。私自身、一人の映画監督として、国内でやらないといけないところはまだまだたくさんありますが、やはり、もっと大きな挑戦をしたいという思いもあります。

片岡： 貴重なお話を有難うございました。

<完> (一部敬称略)

聞き手

片岡秀太郎